

「伝統医学：その課題と期待」

東海大学医学部長

黒川 清

人間はいつも病気と戦い、死を恐れてきた。「健康でない」ときにどうすれば良いか、経験的な積み重ねは、古くギリシャ、ローマ時代以前から中国、インドなど世界中いたるところで使われ、世代を超えて伝えられてきた。文字と印刷技術の発明はこれらの経験の伝承を記述し、広く伝える手段となった。しかし、交通と情報の手段は限られており、外の世界に広がるにはもっと時間がかかった。近代西洋の分析的科学は、医学に画期的な理解と進歩をもたらした。科学的分析方法の進歩とともに、人間の身体と病気のメカニズムが解析され、還元的な科学分析の結果はついにヒトのゲノムが読むに至り、クローン技術の可能性は限りない可能性を予告する。しかし、どんなに科学が進歩し、疾病構造は変化してもヒトは病気になり、必ず死ぬのであり、多くの病気と生命の秘密は今でもほとんど解き明かされていない。日本は歴史的にも地勢的にも中国医学を伝承してきた。鎖国の徳川時代にオランダ医学が到来し、還元主義的西洋医学を広め、東洋医学と並列に使われていた。明治維新の激変の時代、西洋医学のオランダ医学からドイツ医学への政策的転換と種痘の導入などを契機として、東洋医学は急速に傍系となった。明治維新からの50年、日本は「脱亜入欧」で近代西洋化をめざして一応の成功を収めたが、敗戦後20世紀の後半は経済成長と、国民皆保険の医療保健制度下での「漢方薬品」の導入と民間療法の広がりなどが見られた。「国際化」21世紀を迎えるにあたり、世界は小さくなり、種々の「伝統医学」「民間療法」の広がりが世界的になり、アメリカでも「伝統医学」の科学的根拠が探られ、検討されるにいたっている。21世紀を迎えるにあたって「20世紀のアジアのリーダー」日本の役割は何か。21世紀の医学の将来と「伝統医学」の課題と期待を探る。